

—茨城県土浦市—

三芳古墳 東谷遺跡 (2次)

宗教法人真澄寺駐車場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998.12

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

—茨城県土浦市—

み よし こ ふん ひがし たに い せき
三芳古墳 東谷遺跡 (2次)

宗教法人真澄寺駐車場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 12

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

序 文

土浦市は霞ヶ浦や桜川など水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳などの遺跡が数多く存在しています。このような遺跡は当時の人々の生活や環境などを知る手がかりとなります。また、現代に生きる私たちが豊かな生活を送ることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺跡を保護し、後世に伝えることは私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためには重要なことです。

この度、宗教法真澄寺の駐車場造成に伴い、三芳古墳や東谷遺跡の一部について記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の成果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、宗教法真澄寺をはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対し、厚く御礼を申し上げます。



平成10年12月

上浦市教育委員会
教育長 尾見 彰 一

例 言

- 1 本書は、宗教法人真澄寺駐車場建設に伴う、三芳古墳、東谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は宗教法人真澄寺の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 発掘調査は1997年12月3日から同年12月26日まで行い、その後整理作業を行った。
- 4 発掘調査は三芳古墳は本田信之が担当し、調査員として黒田友紀、調査補助員として加藤寛生が当たった。東谷遺跡は黒田が担当した。
- 5 本書の編集は本田・黒田が行った。
- 6 本書の執筆は下記の通りである。
黒澤春彦…第1章 第1節 あとがき
本田……………第1章 第2節 第3章 第1・2・4節 第5章 第1・2・3節
黒田……………第2章 第1・2節 第3章 第2・3節 第4章
- 7 整理作業は遺物実測、トレース、図版、写真を本田・黒田が行った。
- 8 本調査及び報告書作成には下記の諸機関および下記の方々にご援助、ご協力を賜った。
宗真澄寺 働一如社 働北野建設 働常陸測建 鶴町明子 福田礼子
- 9 本遺跡の資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡 例

- 1 遺構・土層実測図については下記の通り掲載した。
 - (1) 古墳全体図は縮尺250分の1、周墜・土坑は60分の1、東谷遺跡は80分の1で掲載した。
 - (2) 「SK」は土坑、「K」は攪乱を意味する。
 - (3) 破線は推定線を示す。
 - (4)  は旧表土を示す。
 - (5) 土層番号Iは表土、IIはローム漸移層、a～iは古墳築造に伴わない土を示す。
- 2 土層観察と遺物における色相の判断は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を使用した。
- 3 遺物実測図については下記の通り掲載した。
 - (1) 縮尺は三芳古墳は3分の1、東谷遺跡は2分の1で掲載した。
 - (2) 遺物実測図中の一点鎖線は復元実測を示す。
 - (3)  は繊維土器を示す。
- 4 土器観察表については下記の通り掲載した。
 - (1) 法量は、A：口径 B：器高 C：底径 D：高台径とする。（ ）は現存値、[]は復元推定値を表す。
 - (2) 胎土は白色の鉱物を長石、半透明・透明の鉱物を石英とした。
 - (3) 焼成は良好、普通、不良の3段階に分けた。
 - (4) 備考の欄の上位に、実測図に対しての残存率、中段に出土遺構、下段に出土位置を記した。

土浦市遺跡調査会組織（平成9年度・10年度）

- 会 長** 須田直之（土浦市文化財保護審議会長）
- 副会長** 尾見彰一（同市教育委員会教育長）
- 理 事** 大塚 博（同市文化財保護審議会委員） 五頭英明（同市企画調整課長）
出地隆治 古渡善平（同市区画整理課長） 坂入 勇 荻野房男（同市建築指導課長）
石神進一（同市都市計画課長） 細田俊雄 岡田和則（同市耕地課長）
内海崎保生（同市土木課長）
岩沢 茂（同市教育委員会文化課長）
- 監 事** 中川茂男（同市教育委員会教育次長） 小野政夫（同市監査事務局長）
- 幹事長** 宮本 昭（同市教育委員会文化課長） 来栖 稔（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）
- 幹 事** 矢口俊則（上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長）
萩島 優（同市教育委員会文化課課長補佐）
小貫俊男（同市教育委員会文化課主査／課長補佐） 塩谷 修（土浦市立博物館係長）
石川 功 榎 陽介 黒澤 春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹）
中澤達也（土浦市立博物館主幹） 宮本礼子（同市教育委員会文化課主事）

調査者名簿

三芳古墳

- 調 査 主 任** 本田信之
調 査 員 黒田友紀
調査補助員 加藤寛生（国学院大学学生）

東谷遺跡

- 調 査 主 任** 黒田友紀

発掘参加者

安達浩二 飯田志満了 大久保由紀子 大坪美知子 加藤博司 木村時政 小柳道雄 槇田整了

整理参加者

石浜敏子 大久保由紀子 大坪美知子 槇田整了

調査事務局

黒澤春彦 鈴木ひと美 中村和弘

目 次

序 文		第3章 三芳古墳の調査…………… 6
例 言		第1節 墳丘…………… 6
凡 例		第2節 周陸……………11
調査会組織		1 北側周陸……………11
調査者名簿		2 南側周陸……………11
目 次		第3節 出土遺物……………14
第1章 調査経過…………… 1		第4節 墳丘下の調査……………16
第1節 調査に至る経緯…………… 1		第4章 東谷遺跡……………16
第2節 調査方法と経過…………… 1		第5章 まとめ……………19
第2章 位置と環境…………… 3		第1節 墳丘及び周陸……………19
第1節 地理的環境…………… 3		第2節 出土遺物……………20
第2節 歴史的環境…………… 3		第3節 三芳古墳の位置付け……………21
		あとがき……………23
		報告書抄録……………24
		写真図版

挿 図

写真図版

第1図 三芳古墳・東谷遺跡周辺地形図………… 2	PL1 遠景・試掘状況
第2図 周辺の遺跡…………… 4	PL2 三芳古墳調査前全景・終了全景・北側周陸
第3図 三芳古墳調査区全体図…………… 7	PL3 南側周陸・南側周陸土層断面・南側周陸 遺物出土状況
第4図 三芳古墳全体図…………… 8	PL4 墳丘土層断面
第5図 第2・4号トレンチ土層断面図 ……9・10	PL5 第1号土坑・東谷遺跡調査前全景・土坑
第6図 北側周陸完掘状況実測図……………12	PL6 出土遺物
第7図 南側周陸完掘状況実測図……………13	
第8図 三芳古墳出土遺物……………15	
第9図 第1号土坑実測図……………16	
第10図 東谷遺跡調査区全体図……………17	
第11図 東谷遺跡土坑出土遺物……………18	
第12図 三芳古墳復元想定図……………19	

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

平成9年3月28日に宗教法人真澄寺より、上浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が上浦市教育委員会に提出された。申請地には周知の遺跡である東谷遺跡や、湮滅とされている三芳古墳が存在している。現地踏査を行ったところ、三芳古墳の墳丘の一部が残存していることが確認された。

当教育委員会では平成9年10月9日、2遺跡の範囲確認と内容把握のために確認調査を実施した。その結果、三芳古墳からは墳丘と周隍、東谷遺跡からは縄文土器片や土坑状の落ち込みが発見された。試掘の結果をもとに事業者と協議を行ったが、工事の内容上、現状保存は困難であるということであった。そのため、発掘調査による記録保存を行うことで合意した。調査は上浦市遺跡調査会（会長須田直之）に委託し、平成9年12月2日、教育委員会が立会い者となり事業者と当調査会で契約を締結した。

第2節 調査方法と経過

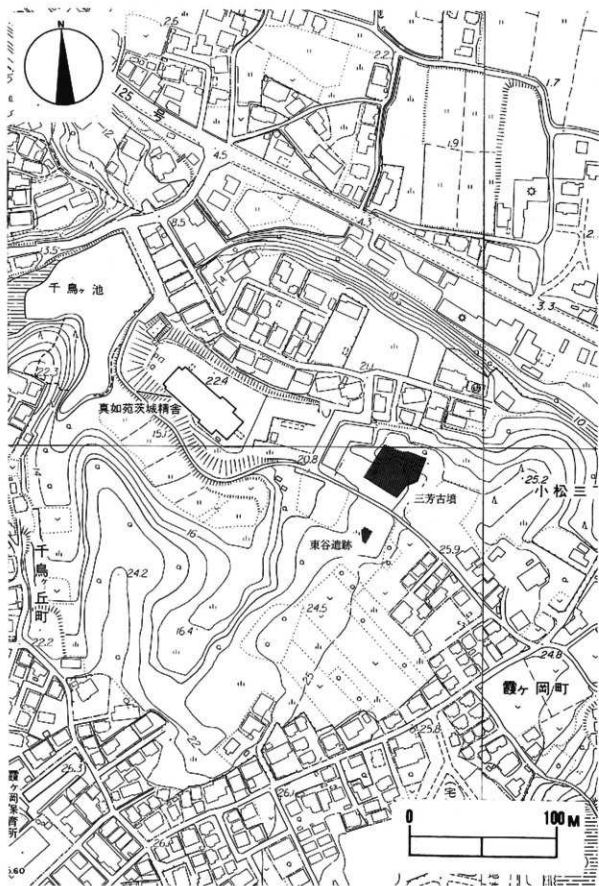
三芳古墳は大部分が削平されており、埋葬施設の残存の可能性が低いと予想されたため、盛土調査、周隍による墳形及び墳形規模の確認を主たる目的として12月3日調査が開始された。調査に先立って、残存する墳丘及び周辺の地形測量（原図100分の1・25cmコンター）を行い、その成果を基に各トレンチ（第1～4号）及び調査区全域に5m四方のグリッド（南北の軸線は、磁北より24°33'40"西に傾く。東西A～G、南北0～6）を設定した。

地形測量と並行して東谷遺跡の調査が行われた。確認調査時において、遺構確認面まで40cm程の深さがあり、遺構が破壊される可能性が少ないため、重機による表土除去を行った。調査区域内を精査した結果、土坑1基を検出した。遺構には南北にセクションベルトを設け、覆土の堆積の様子を観察した。上層観察は色相・含有物の種類や量及び締り等を注記することを基準とした。遺構の平面実測は平板測量（原図50分の1）で行った。

周隍の調査は、確認調査の際に墳丘の北側と南側の2箇所で見出していた部分を手掛かりにして、手作業により遺構確認面まで掘り下げた。南側周隍には、セクションベルトを2本設け、東側からそれぞれ1～3区とした。さらに、覆土の堆積の様子を観察し、遺構や遺物の平面実測は平板測量（原図40分の1）で行い、遺物には標高、出土地点を記録し、遺物番号を付けて取り上げた。

墳丘の調査は、比較的旧状を留めていると思われる北・東側の裾部が調査区域外になっているため、四分画法を用いず、トレンチ法（第2、4号）によって表土・盛土・旧表土の堆積の様子を観察し、20分の1の図面に記録した。土層観察については、東谷遺跡の調査の際と同様である。現存する墳丘平坦面に設置した第3トレンチにおいて埋葬施設の再確認を行ったが、埋葬施設と思われる痕跡は確認できなかった。又、墳丘の断ち割り作業の際、古墳築造以前の土坑が確認され、その調査にあたった。

写真は土層断面・遺物出土状況・完掘状況等必要に応じて撮影した。最後に墳丘上を清掃して、完掘の全体写真を撮影した。それと並行して器材の撤収を行い、12月26日、全ての調査を終了した。



第1図 三芳古墳・東谷遺跡周辺地形図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

三芳古墳は茨城県土浦市小松3丁目624他に所在し、東谷遺跡は霞ヶ岡町658に所在している。今回行った2次調査の地点は、三芳古墳から道路を挟んで南へ約50mの所に位置する。

土浦市は茨城県の中央よりやや南に位置し、東を霞ヶ浦に接している。市域は、市街地を流れる桜川および南部を流れる花室川によって形成された桜川低地と、それを境に北部の新治台地、南部の筑波稲敷台地とから成る。標高は新治台地が25~27m、筑波稲敷台地が24m前後である。地質は古東京湾時代に堆積した木下層を基盤として、上部に向かって常総層、関東ローム層、表土が順次堆積している。

両遺跡は北約1kmに桜川、南約1.5kmに花室川が流れる筑波稲敷台地の東端部に位置し、桜川によって開析された谷の谷頭となっている。調査前の状況は荒蕪地で、一部が駐車場として利用されており、周辺には住宅が建ち並ぶ。

第2節 歴史的環境

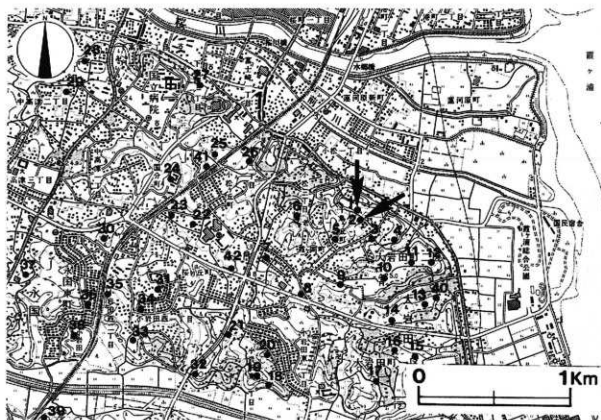
三芳古墳(1)・東谷遺跡(2)の所在する桜川及び花室川水系の台地上には、古墳時代や平安時代を中心に数多くの遺跡が存在している。主要な遺跡を中心として、時代別に概観していきたい。

旧石器時代の遺物としては、池の台遺跡(25)からナイフ形石器が採集されている。

縄文時代早期の遺跡では、永国遺跡(36)や今回報告する東谷遺跡から、茅山式期の土器片が出土している。またビヤ首遺跡(30)からは早期から中期にかけての上器片が採集されている。前期になると、花室川の南側を中心に遺跡数が増加する。中期の遺跡も多く、六十原遺跡(22)からは阿玉台・加曾利EⅠ式期の竪穴住居跡や土坑が、また同一遺跡と考えられる六十原A遺跡(23)からは環状に配された竪穴住居跡と袋状土坑が検出されている。和台遺跡(37)からは2段に掘り込まれた大型の竪穴住居跡、永国遺跡からは加曾利E期の竪穴住居跡が検出されている。後・晩期になると遺跡数は減少傾向を示し、当期に属する貝塚としては小松貝塚(41)があげられる。

弥生時代の遺跡は全体を見ても少ないが、当地域においては永国遺跡、和台遺跡から後期の竪穴住居跡が検出されている。特に和台遺跡では赤彩された壺が出土しており、貴重な資料といえる。

古墳時代には数多くの集落と古墳が築造され、特に後期に至って遺跡数の大幅な増加が認められる。まず前期の遺跡としては、霞ヶ岡北遺跡(3)、内根A遺跡(11)、永国遺跡等がある。東谷遺跡からは第1次調査時に、竪穴住居跡より北陸系の甕が出土し、古墳時代前期の当地域における北陸系文化の影響を窺い知ることができる。中期の遺跡としては、内根A遺跡、内根B遺跡(10)、永国遺跡がある。後期の遺跡では霞ヶ岡遺跡(8)、木曾北遺跡(13)、木曾遺跡(14)、神出遺跡(19)、内出後遺跡(21)、小松遺跡(26)、西原遺跡(29)、桜ヶ丘遺跡(31)、油交田遺跡(34)、阿ら地遺跡(35)、宮久保遺跡(38)等がある。発掘調査によって遺構が確認されたものでは、房谷遺跡(6)、池の台遺跡(25)、永国遺跡から竪穴住居跡が検出されている。永国遺跡は前期から後期まで長期に渡って形成された集落跡である。



第2図 周辺の遺跡 (国土地理院発行 1/25,000に加筆)

【周辺遺跡一覧表】

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中近
1	三芳古墳				○			17	岩田館跡						○
2	東谷遺跡		○		○			18	中居遺跡					○	○
3	霞ヶ岡北遺跡		○		○	○		19	神出遺跡		○		○	○	○
4	霞ヶ岡古墳				○			20	東出遺跡					○	○
5	小松古墳				○			21	内出後遺跡	○	○		○	○	○
6	房谷遺跡				○			22	六十原遺跡		○				
7	池ノ端遺跡				○			23	六十原A遺跡		○				
8	霞ヶ岡遺跡		○		○	○	○	24	国分遺跡		○				
9	内根C遺跡				○	○		25	池の台遺跡	○		○	○		
10	内根B遺跡		○					26	小松遺跡			○	○		
11	内根A遺跡				○	○		27	高津天神山古墳群				○		
12	ひさご古墳				○			28	弁天社遺跡				○		
13	木曾北遺跡				○	○		29	西原遺跡				○		
14	木曾遺跡				○	○		30	ビヤ首遺跡		○				
15	五蔵遺跡		○		○	○		31	桜ヶ丘遺跡				○	○	
16	中内山古墳群				○			32	南古屋敷遺跡					○	○

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中近	番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中近
33	いさろ遺跡				○			38	宮久保遺跡				○	○	
34	油麦田遺跡				○	○		39	右粉十三塚						○
35	阿ら地遺跡				○	○		40	大岩田貝塚						○
36	水国遺跡		○	○				41	小松貝塚		○				
37	和台遺跡	○	○	○				42	桜ヶ丘古墳				○		

また三芳古墳に近在する古墳として、霞ヶ岡古墳(4)、小松古墳(5)、ひさご古墳(12)、中内山古墳群(16)、高津天神山古墳群(27)、桜ヶ丘古墳(42)がある。最も近くに位置する、霞ヶ丘古墳と小松古墳(湮滅)は『土浦市史』によると円墳であったことが窺える。霞ヶ浦を臨む台地先端に構築されたひさご塚古墳は前方後円墳で、付近から馬形埴輪の鞍の一部が発見されている。中内山古墳群は、現存で方墳1基と円墳5基が確認されている。円墳の一つからは、須恵質のものを含む円筒埴輪が採集されており、また、かつて多数の管玉が出土したと言われている。高津天神山古墳群は桜川を見下ろす南岸台地上にあり、現在公園内に2基の円墳が残されている。土浦市立博物館所蔵の力士埴輪は本墳からの出土と伝えられている。また東京国立博物館所蔵の武人埴輪は本古墳群周辺からの出土である。桜ヶ丘古墳(湮滅)では板石4枚が畑中より検出されており、箱式石棺を持つ埋葬施設が存在が窺える。

奈良・平安時代の遺跡としては、霞ヶ岡遺跡、内根C遺跡(9)、木曾北遺跡、五蔵遺跡(15)、中居遺跡(18)、神出遺跡、東出遺跡(20)、内出後遺跡、小松遺跡、西原遺跡、南古屋敷遺跡(32)、油麦田遺跡、宮久保遺跡等がある。水国遺跡では、発掘調査によって平安時代の集落が確認されている。



作業風景

第3章 三芳古墳の調査

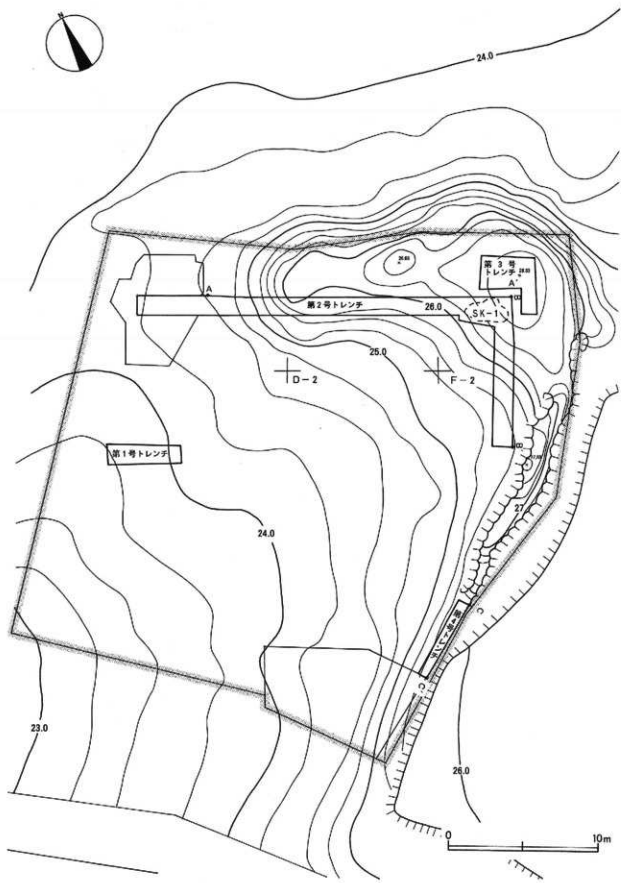
第1節 墳 丘

本墳は台地上に立地し、標高24.0mより上位に築造されている。墳丘は大部分が削平されており、「L」字状に残存している。墳丘上は篠竹で覆われていて、松の木なども数本繁っていたが、残存する盛土の依存状態は比較的良好であった。墳丘北東側は旧状を留めていると思われる。墳丘北側の墳頂には5×4m程の楕円形の平坦面があり、標高は26.83mである。また、墳丘の南東側はほぼ垂直に削られ、急崖をなしている。露出している上層断面観察により墳丘の一部と確認できたが、崩れる可能性があるため本調査では調査の対象から外した。このマウンドの標高は27.83mを測るので、墳丘北側にある平坦面は、本来の墳丘平坦面ではないと思われる。現存する墳丘規模は東西24.1m、南北28.5m、高さ3.3mを測る。周陸の調査結果により本墳を復元すると、直径約34m程の円墳と推定される。

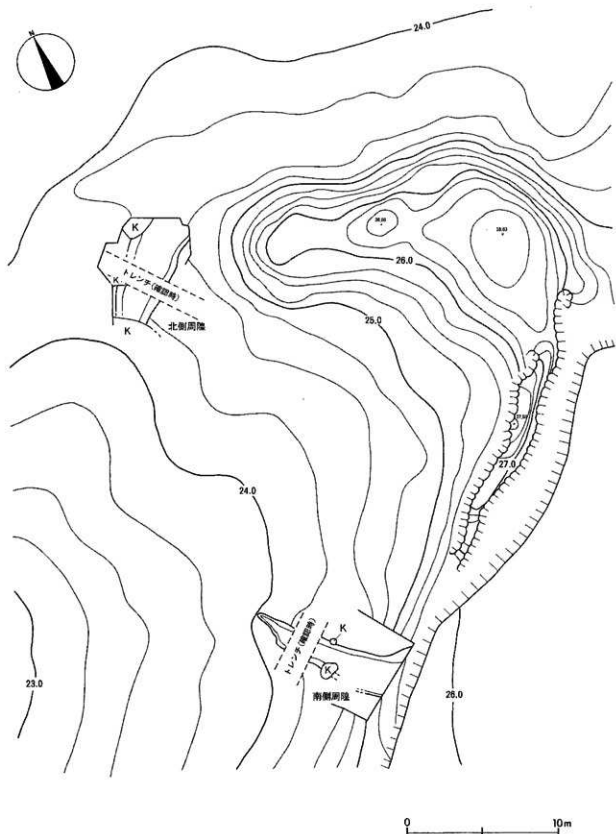
墳丘の調査はトレンチを3本(2～4号)設定し、土層断面の観察を行い、墳丘構築状態及び墳丘墳端の確認を行った。なお墳丘平坦面の第3号トレンチにおいて、埋葬施設の確認を行ったが、その痕跡らしい掘り込みは検出できなかった。埋葬施設は墳丘と同時に削平されたと思われる。また、墳丘盛土中には縄文土器、土師器片が混入していた。

旧表土は黒褐色を呈し、ローム小、粒子を少量含み、締まりは極めて強い土質である。標高25.83～25.65mの間に35cm程均等に堆積している。したがって、古墳築造前の旧地形は、東西方向においてはほぼ平坦であったと思われる。旧表土面から周陸の底面まで、北側周陸で2.00m、南側周陸では1.60mを測った。盛土は、墳丘全体に残存し、現存する墳丘の北東側、平坦面付近においては、25.63mより上位に確認でき、厚いところで1.23mを測った。平坦面南側においてロームを大量、黒色土を少量含む褐色土質の盛土が旧表土の上位に積まれている。その上に、旧表土に似た焼土、ローム粒子を微量含む黒褐色土の層を積み、さらにその上に、黒褐色土層と褐色土層を交互に積んでいる。上層の黒褐色土層は薄く積まれている。また、第2号トレンチ西側と第4号トレンチにおいて、墳端の確認を行ったが、墳丘削平後の盛り土が堆積している状態であったため、墳端及びテラスなどは確認できなかった。

今回の調査では墳丘の墳端を確認することはできなかった。したがって、墳丘の構築方法を明確にする結果は得られなかった。

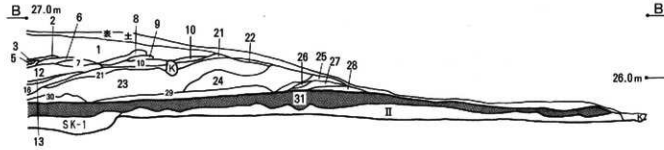
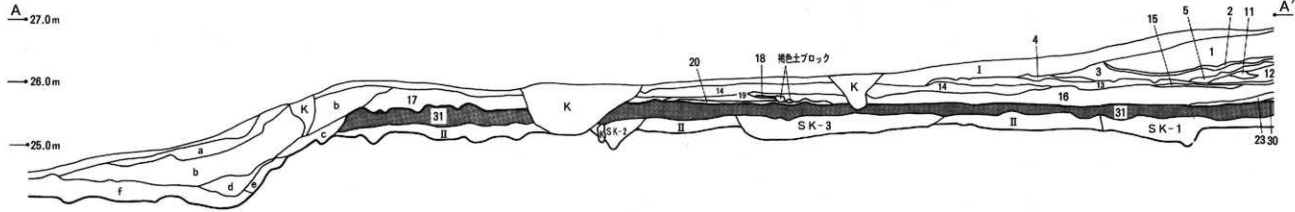


第3図 三芳古墳調査区全体図

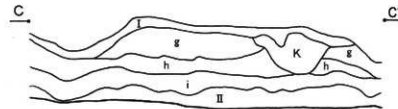


第4図 三芳古墳全体図

第2号トレンチ



第4号トレンチ



- 1 7.5YR4/8 褐色 ローム小・粒中量, 黒色土小微量
 - 2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・粒少量, 黒色土中・小少量
 - 3 7.5YR4/4 褐色 ローム小少量, ローム粒中量, 黒色土中・小少量
 - 4 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒中量, 黒色土中少量
 - 5 7.5YR3/4 褐色 ローム中量, ローム粒少量, 黒色土中微量, 黒色土小少量
 - 6 7.5YR3/4 暗褐色 黒色土粒微量
 - 7 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒微量, 黒色土中微量, 黒色土小少量
 - 8 7.5YR4/6 褐色 黒色土小少量, 黒色土粒微量
 - 9 7.5YR3/2 暗褐色 ローム小・粒少量
 - 10 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大微量, ローム小・粒中量, 黒色土中・小少量
 - 11 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒少量, 黒色土小少量
 - 12 7.5YR4/4 褐色 ローム小・粒中量, 褐色土小・粒微量
 - 13 7.5YR3/2 暗褐色 ローム中量, ローム小・粒少量, 締り強
 - 14 7.5YR4/3 褐色 ローム粒中量, 黒色土中量, 黒色土小少量, 締り強
 - 15 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小少量, ローム粒中量, 黒色土粒微量
 - 16 7.5YR2/2 暗褐色 焼土粒微量, ローム粒微量, 締り強
 - 17 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中・小・粒少量, 褐色土小少量, 黒色土粒中量
 - 18 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小中量, ローム粒少量, 褐色土大中量, 締り強
 - 19 7.5YR2/2 暗褐色 焼土大微量, ローム粒微量, 締り強
 - 20 7.5YR4/3 褐色 ローム粒中量, 黒色土小少量, 締り強
 - 21 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中・小少量, 黒色土小少量
 - 22 7.5YR2/2 暗褐色 ローム小微量
 - 23 7.5YR4/4 褐色 ローム大少量, ローム中・小・粒多量, 褐色土大・中少量, 黒色土粒中量
 - 24 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大少量, ローム中中量, ローム小微量
 - 25 7.5YR2/2 暗褐色 ローム中・粒少量, 締り強
 - 26 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒少量
 - 27 7.5YR2/2 暗褐色 ローム中・粒少量, 締り強
 - 28 7.5YR3/2 暗褐色 ローム大中量, ローム中・小少量, ローム粒微量, 褐色土小微量
 - 29 7.5YR3/4 暗褐色 焼土微量, ローム大少量, ローム中・小中量, ローム粒少量
 - 30 7.5YR4/4 褐色 ローム中・小・粒中量, 褐色土大微量, 黒色土小少量
 - 31 7.5YR2/2 暗褐色土 ローム小・粒少量, 締り強 (旧表土)
- a 7.5YR4/4 褐色 焼土小微量, ローム大微量, ローム粒少量
 - b 7.5YR4/6 褐色 ローム小・粒少量, 締り強
 - c 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒少量, 黒色土小少量
 - d 7.5YR4/6 褐色 ローム大・中・粒少量
 - e 7.5YR4/4 褐色 ローム粒少量, 褐色土小少量, 締り強
 - f 7.5YR3/4 暗褐色 焼土小微量, ローム小・粒少量
 - g 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・粒微量
 - h 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・粒少量, 黒色土小少量
 - i 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小微量, 炭化物微量, ローム粒微量

第5図 第2・4号トレンチ土層断面図

第2節 周 障

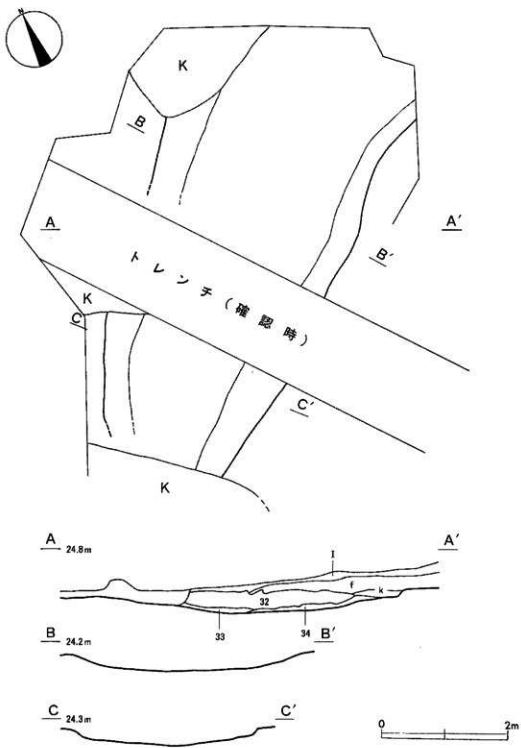
周障は、墳丘北西側と南側の2箇所でも部分的に検出された。本稿においては便宜上、墳丘北西側で検出した周障を北側周障、南側で検出した周障を南側周障と呼ぶ。両周障とも上部をかなり削平されており、遺存状態は悪い。両周障間にはトレンチ（第1トレンチ）を設定したが、表土直下で粘上層が露出し、周障は確認できなかった。おそらく、周障の大部分は墳丘と同時に削平されたものと思われる。遺物は主に南側周障から出土している。

1 北側周障（第6図）

調査区北隅に位置する周障である。北側は調査区域外へ延び、南側は攪乱により途中で切られるが、本来は南側の周障へ続くものと考えられる。残存長は約7mを測り、平面形は緩い弧を描く。規模は最大上幅3.4m、最大下幅2.4m、深さは最深部で0.3mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、上部をかなり削平されている。覆土は土層番号32～34で、ほとんど含有物のない黒褐色土が主体を占め、底面にローム粒子を含んだ褐色土が堆積する。いずれも非常に締りのある土である。fは削平された後に堆積したと考えられる。遺物は、土師器の小破片がごく少量出土している。

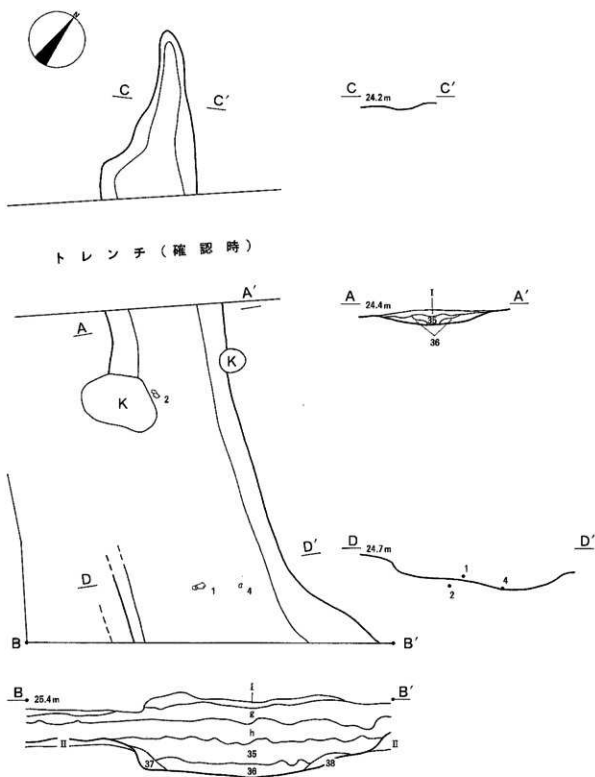
2 南側周障（第7図）

調査区域東端に位置する周障である。周障の上部は墳丘削平時にかなり削り取られているが、周障の遺存状態は東側に行くほど良好である。南側周障の東端は調査区域外に延び、西端は途切れているが、本来は北側周障に続くと思われる。平面形は緩い弧を描き、残存長は10.8mを測る。現存する周障の最大上幅は2.8m、最大下幅は2.2m、深さは最深部で0.7mを測り、断面形は浅い皿状を呈している。土層番号g～hは墳丘が削平された後に運ばれた盛土である。覆土は土層番号35～38で、ほとんど含有物のない黒褐色土が主体となっており、全部で4層に分層できる。出土遺物は1区の36層及び2区の35層を中心に高杯（1～6）、甕（8）が出土している。また、周障上層から円筒埴輪片（7）が1片出土しているが、混入の可能性が高い。



- 32 7.5YR2/2 黒褐色 □-ム大数量, □-ム粒少量, 埴り強
- 33 7.5YR4/4 褐色 □-ム中数量, 埴り強
- 34 7.5YR4/3 褐色 □-ム小数量, □-ム粒少量, 埴り強

第6図 北側周壁完掘状況実測図



- 35 7.5YR2/2 黒褐色 焼土小・粒微量, ローム粒微量
 36 7.5YR3/4 暗褐色 焼土小微量, ローム小少量, ローム粒中量, 埴り強
 37 7.5YR3/2 黒褐色 ローム大中量, ローム小少量, ローム粒微量, 埴り強
 38 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小少量, ローム粒中量, 黑色土粒少量

0 2m

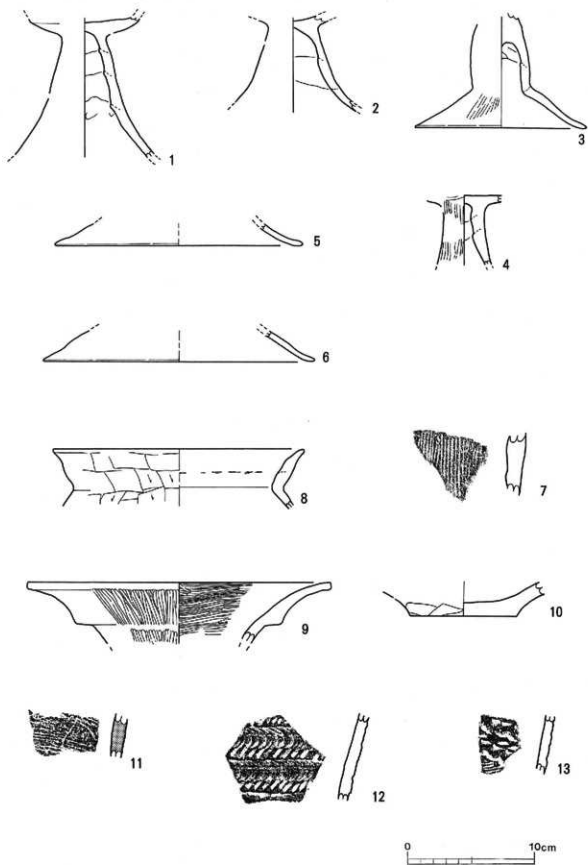
第7図 南側周障完掘状況実測図

第3節 出土遺物

本墳では、周隍や墳丘盛土から縄文土器・土師器・埴輪片が出土している。特に南側周隍の南西寄りから高杯等多数の土師器片が出土している。本墳に伴うものとしては、南側周隍より検出された土師器の高杯6点がある。その他混入と考えられる遺物で縄文土器3点、土師器3点、円筒埴輪片1点を図化した。

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	高土師器 杯	B (11.0)	杯部から脚部の破片。杯部は下位に稜を持つ。脚部はラッパ状に開く。	器面が磨滅しているため明らかではないが、脚部外面上位に縦方向へラナデを施す。内面に輪痕あり。	長石 石英 橙色 普通	70% 南側周隍 1区下層
2	高土師器 杯	B (7.6)	杯部から脚部の破片。脚部はラッパ状に開く。	外面は磨滅しているため不明。内面に輪痕あり。	長石 石英 橙色 普通	40% 南側周隍 2区床面直上
3	高土師器 杯	B (8.7) D [13.6]	脚部片。脚部は凹筒状を呈し、裾部で大きく開く。	裾部外面に縦方向へラ磨きを施す。脚部内面上位に指ナデを施す。	長石 石英 赤色粒 褐色 普通	50% 南側周隍 2区
4	高土師器 杯	B (5.5)	杯部から脚部の破片。	杯部外面下位に横方向へラ削り、脚部外面に縦方向へラ磨きを施す。内面に輪痕あり。	長石 石英 赤色粒 褐色 普通	80% 南側周隍 1区床面直上
5	高土師器 杯	B (1.7) D [19.6]	裾部片。外反気味に緩やかに立ち上がる。	磨滅が著しく、不明。	長石 石英 赤色粒 褐色 普通	10% 南側周隍 2区
6	高土師器 杯	B (2.5) D [21.0]	裾部片。裾端部直上でわずかに膨らみを持って立ち上がる。	磨滅が著しく、不明。	長石 石英 にふい褐色 普通	10% 南側周隍 1区
7	円筒埴輪	高さ (4.9) 器厚 1.5	胴部片。	外面は8~9本/2cmの縦ハケ、内面はナデを施す。	石英 蜜母 赤色粒 にふい褐色 良好	100% 南側周隍 上層
8	土師器 壺	A [19.6] B (4.8)	口縁部片。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は端部で減厚し、やや外反する。	頸部外面に縦方向へラ削り、口縁部外面に横方向へラナデを施す。内面に輪痕あり。	長石 石英 雲母 にふい褐色 普通	20% 南側周隍 上層
9	土師器 壺	A [24.0] B (4.8)	口縁部片。複合口縁で、大きく外反する。	口縁部から頸部外面に縦方向へラ磨き、内面に横方向へラ磨きを施す。	長石 石英 赤色粒 にふい褐色 普通	20% 墳丘盛土 F-1区
10	土師器 壺	B (2.8) C 8.5	底部片。	底部直上に斜方向へラ削りを施す。	長石 石英 赤色粒 褐色 普通	50% 墳丘盛土 E-1区

縄文土器は3点とも、墳丘盛土から検出された。11は前期前半の黒浜式土器で、半截竹管状工具による平行沈線文を施文する。胎土には繊維を多量に含む。12・13は前期後半の浮島式土器で、半截竹管状工具による変形爪形文と、同一工具による刺突文を横位に施文する。13には2種の工具による平行沈線文も見られる。胎土には多量の砂粒と赤色粒を含む。



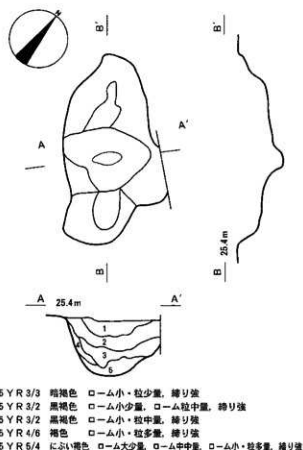
第8图 三芳古墳出土遺物

第4節 墳丘下の調査

墳丘の断ち割り作業の際、土坑を旧表土面より下位に3基確認した。土坑は古墳に伴うものではなく、古墳築造以前に掘り込まれたものと思われる。また、平面プランでは確認できなかったが、第2号トレンチの上層断面を観察した結果、断面に2基の掘り込みが確認された。

《第1号土坑》

第1号土坑は、墳丘平坦面の南西側に位置する。土坑の北側及び西側は、墳丘の断ち割り面になっているため、未調査であるが、長軸2.9m、短軸(1.5)m、深さ0.7mの不整楕円形を呈していると思われる。長軸方向はN-33°-Wである。断面形は二段に構築されている。覆上は5層からなる自然堆積であり、かなり硬く締まっている。出土遺物はなく、時期及び性格については不明である。

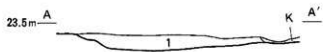
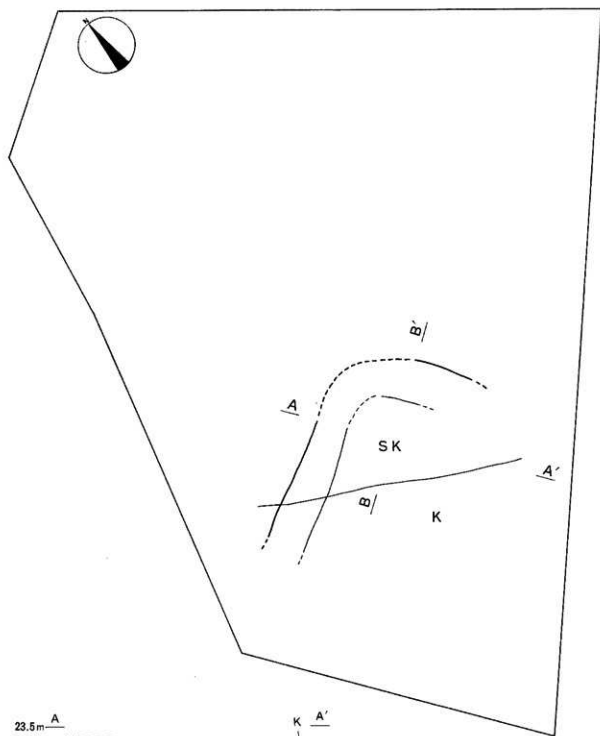


第9図 第1号土坑実測図

第4章 東谷遺跡

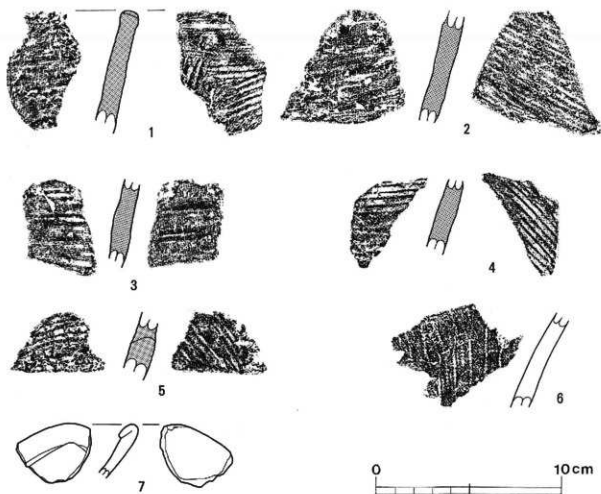
東谷遺跡は標高23~24mの台地上の谷頭に位置する。表土下30~60cmは大規模な攪乱を受けて土層が乱れており、粒土粒子・ブロックが多量に含まれる層と、締り・粘性共に強い黒褐色土層等からなる。ロームは調査区周辺で層厚1m前後を測るが、調査区内においては削平のため見られず、遺構確認面は粘上層となっている。

確認された遺構は土坑1基で、調査区南西に入る大規模な攪乱によって、南壁から南西壁が破壊されている。平面形は方形と推定される。規模は現状で長軸4.7m、短軸2.8m、底面までの最深度0.35mを測る。長軸方向はN-56°-Eである。床は平坦で、壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。覆土は、白色・黄色粘土粒子を少量含んだ締りのある黒褐色土層である。



1 7.5YR3/2 黒褐色 白色粘土大粒量, 粒少量, 黄色粘土粒少量, 埴り残

第10図 東谷遺跡調査区全体図



第11図 東谷遺跡土坑出土遺物

遺物は土坑覆土中より、縄文土器片を中心に少量の土器片が出土している。縄文土器の多くは早期後葉の茅山式に比定されるもので（1～5）、いずれも多量の繊維を含む。前期後半の浮島式（6）、中期初頭の五領ヶ台式かと思われるもの（7）も含まれる。1～5は全て表面に横位条痕文が施文される。裏面は、1は横位条痕文施文後、縦位条痕文、2・4・5は斜位条痕文、3は横位条痕文が施文される。6は、燃糸文を縦位に施文する。7は波状口縁の口縁部片で、内面はよく磨かれている。土師器は細片で磨減も著しいため、器種の同定は困難であるが、刷毛目調整を施した甕の胴部片と思われるものが見られる。

以上の出土遺物は混入の可能性があり、本遺構の時期や性格等は不明である。

第5章 まとめ

三芳古墳は、台地の辺縁部に構築された直径約34mの円墳である。水田面との比高差は約26mで、遠望すれば実際の大きさよりも大きく見え、被葬者の尊厳を高めるには十分であったと考えられる。

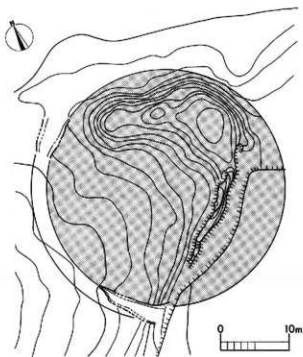
前述の報告のとおり、墳丘の大部分は削平をうけ墳丘の遺存状態は極めて悪く、今回の調査では埋葬施設を確認することができなかった。そのため今回の調査で得られる情報は極めて少ない。本墳の築造時期を検討できる遺物も南側周隍から出土した土師器だけであり、その特徴から本墳は5世紀前葉の築造と推定できる。土浦市内において、当該期に比定できる円墳は確認されていない。こうした観点から、本墳の復元及び土浦市を中心とする桜川下流域においての本墳の位置づけを若干検討してみたい。

第1節 墳丘及び周隍

調査前の現状からは墳形を窺うことはできなかったが、調査の過程において本墳が円墳であると推定した理由は次の2点が挙げられる。1点目は周隍調査の結果、墳丘南側において周隍が弧を描くように巡っている点、2点目としては、削平を受けていない墳丘北東側のコンターが整然と弧を描いている点である。また、墳丘が東側に張り出して前方後円墳になる可能性もあるが、本墳が占地する現状の地形及び遺存する墳丘を総合的にみて、その可能性は低いと思われる。墳丘の墳端は擾乱を受けており、盛土の状況から墳丘規模を想定することはできなかった。周隍から墳丘規模を復元すると、周隍は復元内縁半径が約35.0mを測り、周隍の上面が削られていることを考慮すれば、本墳は直径34m程の円墳と推定できる。

構築方法については、墳丘北側が調査区域外であり、墳丘調査で墳端を確認することができなかったため、明確な構築方法を示すことができない。今回は、可能性がある構築方法について述べておきたい。

断ち割りライン(第2号トレンチ)より北側の第3号トレンチにて、埋葬施設の確認を行った際、第3号トレンチ南東隅に0.5m四方のテストピットを設定した。テストピットを25.2mのレベルまで掘削したが、第2号トレンチにおいて25.7m付近で確認できた旧表土層は検出できなかった。また、墳丘盛土中に旧表土によく似た黒褐色土が旧表土の上に積まれていた。



第12図 三芳古墳復元図

以上のことから、墳丘は旧表土及び地山を削り出して、地山整形を行い、その後地山整形及び周陸からの排土を利用して構築されたと考えられる。今回の調査では、周陸は墳丘の南側に巡っていることが確認できたが、北側については、地山整形が行われた関係で周陸は巡っていないと推定できる。

第2節 出土遺物

本墳に伴うと思われる遺物は土師器で南側周陸を中心に出土した。器種は高杯を主体とし、少量ではあるが、甕と思われる破片も出土した。高杯と推定できるものが25片出土し、そのなかで最低6個体分が確認できた。器形の全体像が分かるものはなく、明確な分類はできないが、比較的残存している杯部底面から脚部にかけての特徴から3つのタイプ(A～C)に分類できる。調整については磨減が激しいため詳細は不明である。

- (器形分類) A 杯部の底面が平底で胸部はラップ状に開く。
B 杯部の底面は丸底で杯部下部に稜を有し、胸部はラップ状に開く。
C 杯部の底面は欠損のため不明、脚部は柱状で裾部は「ハ」字に開く。
- (調整分類) 1 脚部内面下位に横方向のヘラ削りを施し、上位に輪痕を残すもの。
2 裾部外面に縦方向にヘラ磨きを施す。

本墳出土の土師器は和泉期に比定できると考えられるため、櫻村氏の編年案(櫻村 1996 0～Ⅳ段階)を参考にして本墳の築造時期を考えていきたい。A-1(第8図 4)の類別としては、那珂町森戸遺跡第56号居住址(茨城県教育財団 1990)が挙げられる。当遺跡出土の高杯は和泉期Ⅱ段階にあたり、5世紀第2四半期に比定されている。この段階から脚部がラップ状に開く類例が出現し、高杯の器形も多種多様にわたり、出土例も増加する。C-2(第8図 3)の原資料は杯部が欠損しているので、明確なことは言えないが、脚部が柱状で、裾部が「ハ」の字に開き、脚部がやや短い特徴から和泉期Ⅱ段階にあたりと考えられる。本墳に伴う遺物ではないが、墳丘盛土の中に壺の口縁部片(第8図 9)が混入していた。この壺は複合口縁で、大きく外反する特徴を持ち、古墳時代前期にみられるような壺内面の平坦面はない。この内面平坦面は、時代を経るごとに狭小化し、最終段階には内面平坦面はなくなっていく傾向がある。岩井市北前遺跡第7号居住址出土(茨城県教育財団 1993)の壺は内面平坦面が存在し、口縁部は大きく外反する。五領期末と考えられる和泉期0段階(4世紀後葉)にあたる。次のⅠ段階(5世紀第1四半期)の原田北遺跡第69号居住址出土(茨城県教育財団 1993)の壺には、内面平坦面がなくなってしまい、外面に段を有するのみである。さらに、前段階と比べると頸部の高さが低くなり、頸部径も広がる。したがって、本資料の壺は0段階とⅠ段階の特徴を持ち合わせていると思われる、0段階とⅠ段階の移行期の所産と考えられる。このことは、後述する本墳の築造年代とも合致する。5世紀前半になると、当地域では、古墳時代前期を通して行われてきた二重口縁壺を用いた祭祀が終焉し、それに伴い大型古墳では、石製模造品と埴輪による祭祀が確立し、小・中型古墳でも、畿内系柱状高杯を用いた祭祀に移行するという指摘がある。(塩谷 1992 比田井 1995)本墳にも畿内系のものと思われる高杯が出土しており、古墳上で行われた祭

祀に用いたものと思われる。以上のことから、本墳の築造時期は、高杯・埴形土器祭祀の普及以降で、共伴する高杯の器形を考慮して5世紀前葉に求めることができる。

第3節 三芳古墳の位置付け

土浦市内において古墳時代中期に比定できる古墳の事例は、今のところ確認されていない。茨城県内における前期と中期の両期は前節の高杯・埴形土器祭祀の普及や、舟塚山古墳築造時に求められ、5世紀前葉の年代が与えられている。古墳時代前期においては、各水系を一単位とする地域社会が構成され、首長墓の造営もその単位を基準としていたと考えられる。古墳時代前期を通して桜川下流域においても、前方後方墳である后塚古墳、全長84mの前方後円墳である王塚古墳、常名天神山古墳、常名瓢箪山古墳といった首長墓が、桜川左岸に築造されている。中期になると、舟塚山古墳を頂点とする「舟塚山古墳の体制」(田中 1988)が確立し、墳墓の造営にも何らかの規制が行われたと考えられている。つまり、首長墓が墳墓造営の規制の結果、前方後円墳から円墳に代わったのである。実際のところ、那珂川以南の茨城県内において、舟塚山古墳と同時期の古墳の墳形はすべて円墳である。舟塚山古墳と同時期と比定される弁天塚・牛塚・天王原古墳といった円墳の特徴として、台地上に築かれた前代の前方後円墳に対する低地の円墳という関係が指摘されている。(日高 1998)車塚古墳に関しては、「舟塚山古墳体制」の範囲外にあり、舟塚山14号墳は舟塚山古墳の陪塚という性格のため対象から外れる。桜川右岸地域には前期に遡る古墳は確認されていないが、南側周隴から出土した円筒埴輪は、本墳の築造時期より明らかに新しく古墳時代後期の所産だと思われる。このことは、本墳は周辺に古墳時代後期の古墳が存在していた可能性を示唆するものである。本墳は台地の縁辺部に構築されており、前述した低地の円墳ではなく、距離的にも桜川左岸の前期古墳と離れて所在する。しかし、弁天塚古墳等と同様な解釈が可能であるならば、本墳の位置づけを桜川左岸の首長墓が、桜川右岸に移動したものと解釈できるが、さらなる検討が必要である。しかし、中期古墳の空白地域であった当地域において、古墳時代中期の古墳が確認されたことの価値は大きいと思われる。

第3表 茨城県内の前期後半から中期前半の円墳一覧

古墳名	墳丘規模(m)	流域	立地	土師器	埴輪	埋葬施設	副葬品
三芳古墳	34	桜川下流域	台地上	高杯	—	—	—
車塚古墳	95	那珂川流域	台地上	—	壺・円筒	—	—
天王原古墳	30	霞ヶ浦東岸	低地	—	—	—	変形四獣鏡
弁天塚古墳	60	霞ヶ浦南岸	低地	—	—	箱形石棺	方格規矩鏡・鉄剣・小札紙留銜角付青滑石製模造品(鏡・刀子・斧・曲刃鎌)
牛塚古墳	40	出島地域	低地	—	壺・円筒	—	—
舟塚山14号墳	15	恋瀬川上流域	台地上	—	—	箱形石棺	滑石製模造品(刀子・曲刃鎌)
北尾天神塚古墳	37	桜川中流域	台地上	—	円筒	木棺直葬	鉄剣・鉾・斧・鎌・三角板革綴銜角付青長方板革綴短甲・附屬品

引用・主要参考文献

- 茂木 雅博 『墳丘よりみた出現期古墳の研究』雄山閣 1987
- 宮川 徒・茂木 雅博 「規格と技術」『古墳時代の研究』7 雄山閣 1991
- 長谷川 厚 「土師器の編年 関東」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991
- (財)茨城県教育財団 「寺家ノ後A・B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第60集』1990
- 勝田市教育委員会 「市内遺跡発掘調査報告書」1981
- 塩谷 修 「古墳出土の土師器に関する一考察—関東地方の古式古墳を中心として—」『古墳時代の新視覚』雄山閣 1983
- 塩谷 修 「関東地方における古墳出現の背景—とくに古墳祭祀の系譜について—」『土浦市立博物館紀要』2号 1990
- 比田井克仁 「古墳時代前期高杯考」—南関東地方を理解するために—『古代』74号 1983
- 上名川 昭 「大洗町車塚古墳群測量調査報告書」大洗教育委員会 1971
- 菊地 昌宏・茂木 雅博 「茨城県潮来町天王原古墳の測量」『博古研究』3号 1992
- 色川三中 「黒坂命墳墓考」美浦村史研究5 1989
- 田中 裕・日高 慎 「茨城県出島村宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学 先史学・考古学研究』7 筑波大学歴史・人類学系 1996
- 豊崎 卓 「補説」『石岡市史上巻』石岡市 1979
- 佐野市博物館 『企画展 佐野八幡山古墳とその時代』1992
- 田中 新史 「古墳時代中期前半の鉄鍬(一)」『古代探叢IV』早稲田大学出版部 1995
- 樫村 宣行 「和泉式土器編年考—茨城を中心として—」『研究ノート』5号 1996
- (財)茨城県教育財団 「森戸遺跡 北郷C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第55集』1990
- (財)茨城県教育財団 「北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第83集』1993
- (財)茨城県教育財団 「原田北遺跡I 原田西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第80集』1993
- 塩谷 修 「壺形埴輪の性格」『博古研究』3号 1992
- 比田井克仁 「二重口縁壺の東国波及」『古代』100号 1995
- 田中 広明 「霞ヶ浦の首長—茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究—」『婆良岐考古』10号 1988
- 小野山 節 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16-3 1970
- 日高 慎 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」東北・関東前方後円墳研究会 発表要旨資料 1998

あとがき

今回の調査は長い間湮滅とされていた古墳の調査である。この古墳は昭和37年に行われた分布調査によると直径約20m、高さ4mの墳丘で、付近には小松古墳や小規模な円墳が2基存在していたと記されている。しかし昭和50年刊行の「土浦市史」には湮滅と記載されている。おそらく、その間に墳丘は破壊されたようである。以後、湮滅した古墳として扱われてきたのである。

平成7年現地周辺を訪れたところ、今回確認された墳丘の南側は粘土層まで削平を受け、東側は盛土がなされていた。おそらく昭和50年頃にはこの状態であったと思われる。現状は山林と篠やススキが生い茂る荒地で、古墳の存在を確認することはできなかった。

平成9年、今回の調査の契機となる開発の申請が提出され現地を訪れたときには、篠やススキが除去され容易に踏査できる状況になっていた。実際に入ってみると台地の縁辺に不整形な高まりと土手状の高まりを発見することができたが、一見して古墳と判断できるものではなかった。しかしこの土手状の高まりの断面を観察すると交互に上を重ねている版築がみられ、これらの高まりが自然地形ではなく、人為的なものであることが分かった。その後、高まりに沿って2本トレンチを設定し試掘調査を行ったところ、周隍と思われる落ち込みを確認することができた。しかし、削平は予想以上で、特に南側のトレンチは断面で辛うじて確認できる程度のものであった。それでも、版築や周隍の存在から、古墳であることはほぼ間違いないと判断した。こうして三芳古墳は湮滅扱いから20数年を経て復活したのである。

調査を担当したのは、大学を卒業して1～2年という若い2名の調査員である。彼らは遺存状態の悪さなどから苦勞していた部分も見受けられたが、常に考えながらの調査により成果を上げることができた。霞ヶ浦を臨む台地上に5世紀初頭の円墳や円筒埴輪を持つ古墳が存在していたことや、高杯等の土師器を用いる祭祀が行われていたことなどを明らかにすることができたことは大きな成果であろう。この調査成果が今後、当地域の歴史の解明に役立つことができれば幸いである。

今回、調査から報告書刊行に至るまで事業者を始め多くの方々や機関から、ご協力をいただくことができた。文末ではあるが厚く御礼申し上げる次第である。

報告書抄録

ふりがな	みよしこふん		ひがたにいせき							
書名	三芳古墳		東谷遺跡(2次)							
副書名	宗教法人真澄寺駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
巻次										
シリーズ名										
シリーズ番号										
編著者名	本田信之 黒田友紀 黒澤春彦									
編集機関	土浦市遺跡調査会/〒300-0812 土浦市下高津2-7-36									
発行機関	土浦市教育委員会/ 同上									
問い合わせ先	上高津只塚ふるさと歴史の広場/〒300-0811 土浦市下高津1843 TEL 0298 (26) 7111									
発行年月日	1998年12月25日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
みよしこふん 三芳古墳	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 こまつ 小松3丁目624他	08203	1814	36° 4' 46"	140° 12' 36"	1997年 12月3日 ～26日	900㎡	宗教法人真澄寺駐車場建設		
ひがたにいせき 東谷遺跡	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 かみかほり 霞ヶ岡町658	08203	5248 B-3	36° 4' 43"	140° 12' 37"		143㎡			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
三芳古墳	古墳	古墳	古墳1基 土坑3基	土師器 円筒埴輪	直径約34mの円埴と推定。時期は5世紀初頭。					
東谷遺跡	包含層	縄文(早)	土坑1基	縄文土器						

写 真 图 版



三方古墳遠景



三方古墳試掘状況



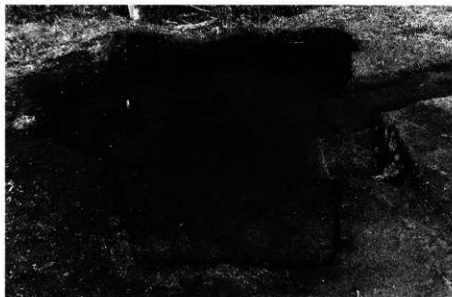
東谷遺跡試掘状況



三芳古墳調査前全景



三芳古墳調査終了全景



三芳古墳北側周墻



三芳古墳南側周隄



南側周隄上層断面



南側周隄遺物出土狀況



三芳古墳填丘土層断面



三芳古墳填丘土層断面



三芳古墳填丘土層断面



三芳古墳第1号土坑



東谷遺跡調査前全景



東谷遺跡土坑



1



2



3



4



8



9



5

6



10



7



11



12



13



1



2



3



4



5



6



7



1



2



3



4



5

三芳古墳 東谷遺跡(2次)

宗教法人真澄寺駐車場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 1998年12月25日

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

300-0811 茨城県土浦市上高津1843

印刷 須崎
